

教 仏 名 聞

第74号
(発行日)
2016年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

死んだら皆、仏か

かつて、政治家の小沢一郎氏が真言宗の本山である高野山で、「仏教は良い。キリスト教と違ってみんな死んだら仏様になる」と発言したことが一時話題となりました。

「死んだらみんな仏になる」いわゆる「死んだら仏」と世間でよく言われますが、しかし仏教ではそうは言いません。亡くなった方を生きている私たちが「仏様と仰ぐ」ことはできませんが、「死んだら皆仏になる」ということは、仏教では言わないことです。
なお、この場合でいう「仏」はおおむね先祖霊のことでしょうが、それは仏教という仏ではありません。

これとよく似て、真宗で「死んだら皆お浄土に帰るのでしょよ」とも時々聞きますが、これも誤解を与えかねない言葉です。
実際、「死んだら皆お浄土に帰るのだ」と日頃言っていた知人のA氏がいて、A氏の従弟が亡くなった通夜の晩、たまたまそのA氏が私に「あの男

(従弟)は浄土なんかには生まれないう」と言ったので、オヤオヤと思ったことがあります。日頃「死んだら皆浄土」と言っていたA氏なのにどうしてかなと、思いましたが、実はA氏とその従弟は仲が悪かったのです。

これを思い出しますに、自分の身近な愛する人とか第三者には「皆お浄土に帰る」などと言いつても、自分の嫌いな人や憎たらしい人はお浄土に生まれるとは言わないし思えないものです。悪くすると「あんな奴は地獄へ墮ちる」と言いかねないのです。

要するにお浄土に皆帰ると言っても、それをどこまで本当に信じているのか、あるいはそれはどういうことなのか、をつきつめず、ただ耳ざわりのよい言葉として言っているに過ぎないように思います。「みんな死んだら仏になる」とも「死んだら皆お浄土に帰る」という言葉も、気休めに言っている場合が多いですね。

というのは、もしまじめに

この言葉を受け取ろうとする、いろんな疑問が湧くはず

です。
すなわち、なぜそんなに簡単に仏になることができるのかとか、私たちの今までの罪はどうなるのかとか、信心の有無は問われないのか、などいろいろな疑問がそこに湧いてくるに違いありません。

しかも、「死にさえすれば皆仏になる、浄土に帰る」となると、もはや仏法を信じることもいらず、お念仏もいらぬことになります。

一般的に言えば修行も信仰もいらなくなりません。そうすると宗教無用、仏教無用となり、寺も教会も無用の長物だということになります。

小沢氏が「キリスト教と違って」といったキリスト教では、神(の言葉)を信じる人は天国に生まれるが、信じな

《 念 佛 寺 報 恩 講 》

十二月二十二日 (木) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇 師

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

い人は天国には生まれないう、といえます。信仰の無い人は煉獄(苦界)あるいは地獄に墮ちると説いてきたのがオースドックスなキリスト教です。それゆえまじめな信者は教会に熱心に通い、神に真剣に祈る生活をするのです。教会にも行かない、神に祈りもしない人が死ねば天国に入るなどとは説くはずもないのです。しかるに近年は「あの人は天国にいった」などと簡単に言いますが、キリスト教からいえば、それは信仰のない人が単なる慰めに言っているだけなのだと言うでしょう。なお天とは神の意味ですから、天国とは神の国のことです。

浄土に帰るにしても、浄土に生まれるにしても、仏になるにしても、そうなる原因あるいは因(たね)がなければならぬはず

その因は有難いことに、阿

弥陀仏が南無阿弥陀仏として
すでに成就して下さり、私た
ちに与えて下さっています。
ただそれを私たちが「受け入
れる」(信心)ことが大事です。
それを信心正因と申します。

浄土に生まれる因(往生の
因)を「ハイ」といただく信
心が大事で、いただいた因が
なければ浄土に生まれること
は決定しないと説かれていま
す。

ではもし浄土に生まれな
いとすればどうなるのか。それ
はまた流転するのだと仰せら
れています。

浄土に生まれる因という
何か固形の種のようなものを
連想するでしょうが、そうい
う塊(かたまり)のようなも
のではなく、仏にならしめ
る功德、浄土へ生まれしめる
有難い善きはたらきです。

それは私の行いの善し悪し
に関わりなく、無条件にだれ
でもに「これを聞けよ、これ
を受けよ」と阿弥陀仏は私た
ちに南無阿弥陀仏となって喚
びかけておられます。

私に資格があつて与えられ
るではありません。まった
く与えられる資格も価値もな
いにもかかわらず、平等に与

えて下さるのです。

阿弥陀仏は南無阿弥陀仏と
なつて私に用きかけ、喚びか
けて下さっています。その喚び
かけ(仰せ)を南無阿弥陀仏
においてお聞かせいただくの
です。

その仰せ通りに聞く(信受)
ことが、南無阿弥陀仏を受け
取るようになるのです。往生
の因を受け取ることになるの
です。受け取られた阿弥陀仏
は私の中にましますと共に、
私を超えて私を包んでおられ
ます。そこに、阿弥陀仏に私
は摂められていることを知る
のです。

なお、阿弥陀仏は眞実のは
たらきであつて、浄土とい
うも仏というも眞実のはたらき
に名付けた名称です。その眞
実は普遍的なはたらきです。か
ら、人は特定の宗教にかかわ
らなくても、自我を超え、宗
教教義を超えて、万人にはた
らいている眞実に触れること
は可能でしょう。それゆえ特
定の宗教に依らなくても眞実
にであうことはできましよう
し、眞実に触れた人は、眞実
に帰するのでありましよう。

(了)

たとい大千世界に

(和讃問答)

たとい大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなうなり

(浄土和讃)

(現代語訳) 大千世界とい
う広い世界に火が満ちていても、
火の中をも通り抜けて、仏の
名号を聞信する人は、永遠に
不退の位にかなうのである。

* * *

D 「このご和讃は曇鸞大師の
『讚阿弥陀仏偈』に

たとひ大千世界に満てらん
火をも、またただちに過ぎて
仏の名を聞くべし。阿弥陀を
聞けば、また退かず。

のところをほぼそのまま和讃
にされました」

N 「大千世界とは」

D 「いわゆる私たちのいる世
界は一世界。それが千集まっ
て小千世界、小千世界が千集
まつて中千世界、中千世界が
千集まつて大千世界といわれ
ます。それがお釈迦様がご教
化される世界だと言われてい

ます。要するに全世界といっ
ていいでしょう。ただし全世
界と云つても迷いの世界のこ
とです」

N 「(みてらん火をもすぎゆき
て)」というのは、この全世界
が燃えさかっている、その中
を通り超えていく、というこ
とでしょうが、これはどうい
うお心でしょうか」

D 「もともとこの言葉は
世界に充滿せんに、かならず
まさにこれを過ぎてこの経法
を聞きて

と仏説無量寿経に説かれてい
ます。釈尊から見れば、この
世界は盛んに火が燃えている
ような世界と見ておられるの
です。法華経にも

〈三界は安きことなし、なお
し火宅の如し〉

という有名な言葉があります。
この世界は火のついた家のよ
うなもので衆生はそんな苦し
みの世界の中にいる、と説か
れています」

N 「火が炎々と満ちているよ
うなのがこの世界だ、とまで
いわれるのはなぜですか」

D 「少し考えてみましょう。

世界の終わりに大火災で燃
えるという解釈もあります
が、この世界を欲界とい
うように、この世界は欲望が
根になつています。生きとし
生けるものはそれぞれが欲望
を燃やし続けながら生きてい
るではありませんか」

N 「この世界の構成員である
生きとし生けるもの、私たち
それぞれのいのちの底に燃え
ているものは強い生存欲であ
るといわれるのですね」

D 「ええ、どこまでも生きた
いという生存欲、のみならず
楽になりたい、楽しみたい、
見たい、聴きたい、触りたい、
食べたい、飲みたい、寝たい、
金が欲しい、セックスがした
い、名誉が欲しい、などなど
の欲望が人の心に渦巻いてま
すね」

N 「人は欲望で燃えている存
在なのですね」
D 「そして、その欲望が形を
取つて露われているのが肉体
とも言えましよう。内に、見
たいという欲望があると目と
視覚神経が表れて来るし、食
べたいという欲望があると消
化器官が表れて来るし、性の
欲望があると生殖機能が表れ
てくる、といえないことはな
いと思います。人はこうした

欲望と肉体でもって大自然に働きかけ、他の命を取り、物を生産し消費してきたのではないでしょうか」

N 「魚でも鳥でも虫でも、生きたいという欲求がもとにあつて、餌を求め、餌を取って、それを喰つて生きのびてきた。人間も生きたいという欲求がもとになり、頭と手足を使つて大自然に働きかけ、食糧を生産したり、他の生命を奪つて生きのびてきたのでしょうか」

D 「生きとし生けるもの、また一人一人が欲望（生存欲を中心）に燃えている。そういうものの集まったのが世界であるとすれば世界全体が欲望で燃えているといえるのではないのでしょうか。あるとき釈尊がガヤ（インド）の近くのガシー山にお弟子とともに登り、下界を見て「世間は燃えている」と言われました」

N 「生存競争をし、食いあつている生き物の世界は欲求で燃え上がっている状況ともいえませんね」

D 「そして、生きたいという欲望を元として、あななりた、こうなりたという限らない願望が一人一人にあるという事は、裏から言えば、

欲求不満があるということですから。私たちの欲求はいつでも満たされない物足りないという不足不満でわだかまっています」

N 「英語でも、欲望はウオント(want)ですが、ウオントには不足という意味も同時にありますね。欲と不足不満の怒りの火が充滿しているのがこの世界なのですね」

D 「ええ、こういう見方は極端と感ぜられるかも知れませんが、しかし、食欲を滅ぼし静かで清らかな涅槃のさとりを完全に成就された釈尊の目から見られたこの世界（娑婆）はそういう姿であると説かれているのです。実際冷静に考えるとどうなづけれます」

N 「だいたい分かりました。では「大千世界に みてらん火をもすぎゆきて」というのは」

D 「こうした火の燃えさかっている世界・社会の中を生きていく。世界が燃えているということとは動きづめということですから、無常の世界です。その中を私たちは生きています。このような世界を生きるに当たっては仏の名一つを聞いて、過ぎて行けよ、超えて行けよ、との仰せです」

N 「（過ぎて）というのは単に生きて行くのではなくて、火宅無常の世界を超えて行けよということなのですね」

D 「ええ生死無常を超えるという意味がそこにあります」

N 「そして、私たちに「仏の御名をきくひとは ながく不退にかなうなり」と仰せられるのですね」

D 「ええ、一番大事なことで、それは仏の名を聞くことだ、と。こんな危ない世界であっても、その中でいろいろ惑わらずにただ仏の名一つを聞きながら生きて行けよ、との仰せです」

N 「心は煩惱の火に焼かれ、肉体は老病死の無常の火に焼かれ、世界は欲と怒りの濁流が流れていても、ただ南無阿彌陀仏の名を聞いて行けといわれるのですね」

D 「ええ、南無阿彌陀仏はいかなる火によつても焼けないし、つぶされないので」

N 「なぜ焼かれないし毀れないのですか」

D 「南無阿彌陀仏ははかりなきいのちと光のはたらきそのものです。これは滅びず毀れず、しかも今ここに私たちにわたらきづめにはたらいていて下さっています」

N 「そんな南無阿彌陀仏の名を聞くと「不退にかなうなり」といわれ、もはや迷いの世界には戻らず、生死無常を超えて、仏の世界に生まれ往くと仰せなのですね。名を聞くのと、なぜ「不退にかなう」のでしょうか」

D 「仏の名を聞くと、阿彌陀仏に摂取されるからです。阿彌陀仏に離れない身になるからです」

N 「名を聞くのですが、聞いてもなかなか救いがその人に実現しないということがあります」

D 「これは仏の名を耳に聴いていても、名にこめられている阿彌陀仏の大悲のお助けを受け入らないからです。大悲の仰せを疑うことによつて、救いがその人に成就しないのです」

N 「疑っているのは成就しないとなると、いつ、成就するのですか」

D 「それは不思議にも「疑つて止まない救いなき身を知らされる時」であるといえましょう。そこに阿彌陀仏の「汝を助ける」という仰せを受け入れるということが起こるのです」

N 「そのような、受け入れる時はいつですか」

D 「その時を私たちの方できめることはできません。今日か明日かも知れず、一年先か十年先かも知れず、あるいは未来世であるかも知れません。阿彌陀仏のお心が流れ込んで下さるので、こちらから何時というわけにはいきません」

N 「なかなか阿彌陀仏の本願を受けられない私たちですね」

D 「ええ、その理由はいろいろあります。その一つはこのご和讃から教えられます。ひたすら仏の名を聞けとおススメ下さっているのです。ところが私たちは、それほど一途に名を聞かないですね。釈尊や曇鸞大師や聖人のこのおススメを素直に聞いていないのです。お念仏を一途に聞こうとしないのですから、なかなか仏の大悲に触れられないともいえましょう」

N 「ろくろく御名を聞かずに、この世のことに心が散り、たとえ真宗のお話しを聞いてもただ聞きっぱなしであつて、南無阿彌陀仏の御名を称え、そのお心を聞くということをしなないのでね」

D 「ええそうですね」

